

日本語学習者の読解文における文章構造の理解の過程 ——ピア・ラーニングによるアウトラインの捉え方を通して——

山本菜穂子

要 旨

総合政策学部の日本語プログラムは、日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つのレベルに分かれ、日本語Ⅰでは「文法」・「読解作文」・「運用」、日本語Ⅱ、日本語Ⅲでは、それぞれ「読解」・「表現技術A」（口頭表現）・「表現技術B」（文章表現）・「総合」といった科目で構成され、アカデミック・ジャパニーズの養成を目指している。

「日本語Ⅲ（読解）」クラスでは、学科科目の履修を目指した専門的な文献購読に役立つ知識、読解力を習得することを目標とし、「文構造の把握による内容理解を重視した授業」、「内容重視により思考を深めることを目指した授業」を行っている。

本稿では筆者が担当する前者の授業における内容理解のための要約文作成時のアウトラインの捉え方に焦点をあわせ、ピア・ラーニングの活動により文章構造の理解がどのように深まったか、また課題について実践報告する。

キーワード：日本語学習者、読解クラス、文章構造の理解、ピア・ラーニング、アウトライン

1. はじめに

総合政策学部では、留学生を毎年入学定員の1割に相当する人数を学部1年生として受け入れ、日本語未履修であっても4年間で卒業させることを目標にデザインされた日本語プログラムが提供されている。日本語科目は日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本語Ⅲの3つのレベルに分かれており、日本語Ⅰは「文法」・「読解作文」・「運用」、日本語Ⅱ、日本語Ⅲは、それぞれ「読解」・「表現技術A（口頭表現）」・「表現技術B（文章表現）」・「総合」といった科目で構成され、アカデミック・ジャパニーズの養成を目指した授業が行われている。

「日本語Ⅲ（読解）」の科目は「学科科目（国際政策、公共政策、環境政策など）を履修する際に必要とされる文献、資料を読むための知識と実践的な技術を習得すること」を目標にしている。2017年度からは2名の教員が「文構造の把握による内容理解を重視した授業」（文構造の学習に重きを置きつつ、専門的な文章を理解するために必要な背景知識となるテーマを選び、内容把握を行う授業）（3コマ）と「内容重視により思考を深めることを目指した授業」（内容・情報の理解・獲得に第一義的な焦点をおき、思考を深めるこ

とを目指した授業) (1コマ) を行っている。

本稿では筆者が担当する「文構造の把握による内容理解を重視した授業」における内容理解のための要約文作成時のアウトラインの捉え方に焦点をあわせ、ピア・ラーニングの活動により文章構造の理解がどのように深まったか、授業実践と今後の課題について述べる。

2. 日本語Ⅲ読解の授業の概要

本学部では、文明論の学びを基礎に社会科学の科目を3つのコース(国際政策・公共政策・環境政策)に対応する形で幅広く開講している。学生はこれらの多様な科目の中から、段階的に政策の基礎知識を総合的に学び、その上で自らの興味と関心に応じて上記の3コースより1つの政策コースを選択し、応用的かつ発展的知識を学ぶことになる。したがって、3つの政策コースで扱われるトピックに対応できる基礎知識と基本的な用語の修得も日本語科目の重要な到達目標である。(山口・山本2019: 64)

「日本語Ⅲ(読解)」クラスでは、「1. 専門科目を履修する際に必要とされる資料を読むための知識と実践的な技術が習得できる、2. 専門的な文献に対応できるようになる」ことを到達目標にしている。そのため、環境問題、社会問題、国際関係、科学技術、政治経済、文化といった様々な分野からテーマを扱っている。17年度春学期より筆者が担当する「文構造の把握による内容理解を重視した授業」では、『大学・大学院留学生の日本語①読解編』、『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』、『生きた素材で学ぶ新・中級から上級への日本語』の読解教材から本学部の国際政策、公共政策、環境政策など学科科目を履修する際の文献購読の理解に必要とされる知識、実践的な技術を修得するために有用なトピック—科学技術(「睡眠時間—短眠と長眠」)、環境問題(「地球温暖化」)、文明(「文明はどのように伝わったか—1茶」)、経済(「衝動買いを誘導する」)、化学工業(「おいしい食感の理由」)、労働問題(「フリーター問題」)、価値観の変化(「若者の自己評価」)を取り上げている。授業でこれらの教材を使用することにより、専門分野での文献講読に不可欠な論理的思考による理解・表現能力の養成を目指している。日本語Ⅰ・Ⅱで学んだことをさらに発展、定着させるために新出語彙、文型練習を行い各トピックを精読し、その後、文章構造を理解するためにアウトラインを考え、それをもとに要約文をまとめ、ピア・ラーニングの活動でさらに理解を深めている。

3. 文章構造の論理的把握のためのアウトライン作成の重要性

日本語の文法の積み上げ学習をし多くの言葉を覚えても、論理的な文章の読み書きのし

かたがわからないために、大学・大学院での勉学や研究に困難を感じている学習者は少なくない。藤原（2017：119）は、語の認識や文の構造を正しく把握し語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができずに誤読する日本語学習者がいると指摘し、解釈に対する柔軟性を読解教育で意識的にトレーニングする必要性を示唆している。上級日本語学習者が学術論文に書かれている内容をどのように理解したかについて分析、考察を行った野田（2014：12）は、学術論文に使われる文には長くて複雑な構造を持つものが多く、文の構造を適切にとらえるのは上級学習者にとっても難しく、正確に文の構造をとらえられないと、その論文に書かれていることに対して不適切な理解をすることになると指摘している。また、田川（2012：34）は、中級学習者にとって読解文の全体構造の理解は容易ではないが、構造と要点の順序で両方を探索させることが要点理解と要点構造の2つの理解を促進させることを指摘し、また、学習者の日本語能力が高まるにつれて長く複雑な文章の理解が必要になり、読解ストラテジーの適切な使用が重要である、と述べている。

よって、授業では、論理的な文章がどのようなものかということが練習を重ねていくうちに自然にわかり、最後には論理的文章を読み書きする力が確実につき、素材となる文章の論理的構造に着目した読みのスキルが習得できる教材（アカデミック・ジャパニーズ研究会編2015b：3）を用い、学術論文を読むための基礎的な読解力を養成している。大学や大学院の学科科目では、学術文献を講読し内容を的確に理解し、レポートにまとめたり発表原稿を書いたりしなければならない。田川（2012:35）が「文章を理解するためには、読み手が文章の構造に着目し、論理関係を探ることが重要である」と指摘しているように、読解文の文章構造を論理的に理解するためにアウトラインを的確につかみ、内容を要約文にまとめる学習は中・上級日本語学習者にとって有用である。

2017春学期から2019年秋学期までは各トピックの文章を精読後、各自アウトライン、要約文の作成をし、ピア・ラーニングによってお互いの内容をチェックし話し合う活動を行った。2020年度春学期は社会情勢（新型コロナウイルス感染拡大）のためオンライン授業が導入された。先学期までの活動に加え、さらに、相互活動を増やす必要性が求められた。よって、クラス全体での話し合いの活動をさらに加え、多角的客観的な視点をより一層取り入れられるようにした。

4. 文章構造の論理的把握のためのアウトライン作成の実践

本稿では、2020春学期に扱ったトピックの中で「衝動買いを誘導する」を取り上げ、実践報告する。このトピックは、経済学の視点から日常生活の購買意欲を喚起させる方法の具体例が書かれており、2017春学期から学習者のトピックへの関心は高かった。内容

について「みんなの生活の役に立つと思う。」「生活と密接な関係があるので、学んだ後、買い物する時よく思い出す。」とフィールドに出て実践的な分析につなげようとする動機づけとなっており、「日常生活で気がつかなかったが、そんな学問があるとびっくりした。」「衝動買いの定義が理解でき、衝動買いを誘導する商品と方法もわかった。」と新しい分野への理解も広がっていた。(山口・山本2019:67)

このトピックではアウトライン作成の意義として「書き手は文章を書く前に、どのような情報をどう組み立てるか、アウトラインを考える。読み手にとっても情報をアウトラインの形で体系的に整理することは、全体の論理的つながりがつかみやすく、記憶にも残りやすい」(アカデミック・ジャパニーズ研究会編2015b:31)点をあげ、文献講読の理解のためにアウトラインをつかむ学習に主眼がおかれている。教材ではアウトラインの大まかな部分が示され、部分的なところを学習者が考え記入していく構成になっていた。学科科目の文献購読では自ら文章の構造について理解していかなければならないため、授業ではクラスで本文を精読後、記入式ではなく各自アウトラインの構成をすべて自分自身で考える課題を課した。その後、Zoomのブレイクアウトルームの各セッションに3～4人のグループに分かれ、ピア・ラーニングでお互いの内容の相違について意見交換をし、新たなアウトラインを作成する活動を行った。教員は各セッションに入り、学生からの質問に答えたり、Zoomの機能(画面共有のしかた等)に不慣れな学生にアドバイスをしたりすることにより活動が円滑に行くように配慮した。最初はZoomでの資料の共有や話し合いに時間がかかっている学生も見られたが、徐々に活発な意見交換がされていった。その後、メインセッションに戻りグループごとにその内容について発表し、クラス全体でさらに再検討を行った。

以下、学期末の授業のアンケート(無記名)から、アウトラインの理解がどのように深まったのか見ていきたい。

アウトラインの作成については、「アウトラインは要約文を書くのに重要な部分だから、必要なポイントの選び方がわかった。」「アウトラインを作るのは要約文を作る第一歩なので、すごく重要なことと思います。」「アウトラインを書くと、それぞれの段落で言いたいことはさらに理解できやすくなるのがわかる。書いたアウトラインを要約文にまとめ、簡単に書けると思う。」「アウトラインを作ることで、段落ごとの重要ポイントがどこなのかを考える力が少し身についた気がします。」と、その意義を理解するコメントが述べられていた。

日本語学習者が最も多く指摘していることは、ピア・ラーニングにより主観的なものの見方から他学習者の客観的な視点を得ることで自身のアウトラインを再チェックし、学びが広がった点である。「アウトラインや要約文を書く時にやはり自分の考えだけで書くから、他の人と意見交換したり、別の内容を見たりする活動は自分だけで書くより勉強が一

層強められたと思う。」「他の人のアウトラインを確認する過程で、同じ文章、同じ内容でも観点によって注目する部分は人によって様々なものであることがわかりました。また、自分の意見と他人の意見を比べてみるができる良い機会でした。」と、自分自身が気がつかなかった新たな観点について述べられていた。

また、「自分にとって重要だと思わなかった部分がチェックした相手には、重要だと思われることがあって、そのようなことについて話し合う機会になって良かったと思う。」「グループでチェックしたりして、お互いに考え方を交えたりできてとてもよかったです。」と、お互いのアウトラインの相違点について話し合いをしたり、説明をしたりすることで内容についてさらに深く考える契機につながった様子が明らかになった。

クラス全体的話し合いでは、「グループまたはペアの話し合いにより、他の人のその内容に対する考え、理解の仕方、まとめ方を知るようになった。それに加えて、クラスで確認することで、内容をより詳しく理解することができた。」「自分が考えた具体的な説明は、大切なこととと思っていましたが、クラスでチェックしたとき、『あ、本当だ、ここはもっと中心なんだ』と思ったときもあります。」「クラスで確認したりする活動は役に立つと思う。お互いに話し合うことによって、正しく要約文を書けるようになった。」と、さらに、よりよいアウトラインについて何度も意見交換を重ねたことによる肯定的なコメントが多く出ていた。

田川（2012：43）は、中級日本語学習者にとって文章全体の構造を把握することは容易ではなく、その原因として文章の長さ（1000字程度）が要点間の関係付けから全体構造への関係付けが困難だった点をあげている。本稿で取りあげたトピックは1400字程度であり学習者は同じような困難を抱えながら、最初の段階の個々の活動では課題に取り組んでいたと思われる。しかしながら、個々からペア、グループでの話し合い、クラスでの意見交換へと活動を重ねることにより、様々な客観的な視点が広がり、文章構造や内容の理解を深めていったように思われる。

5. おわりに

2017年春学期から「日本語Ⅲ（読解）」クラスを担当し、学科科目を履修する際に必要とされる文献、資料を読むための知識と実践的な技術を習得することを目標とし、工夫、改善を行ってきた。2020年度春学期のオンライン授業では、文章構造のアウトラインを的確につかむためにピア・ラーニングやクラス全体での話し合いの活動を先学期よりさらに増やし、内容理解がより一層深まる授業運営を行ってきた。個々の活動では、アウトライン作成の重要性、意義を理解し、ピア・ラーニングでは、主観的なものの見方から別の客観的な視点があることを発見し、自身のアウトラインをフィードバックする大きな契機

となっていた。さらに、クラス全体の活動では、より多くの学習者と相違点について意見交換することによりさらに理解が深まっていた。

今後もクラスの構成（漢字圏、非漢字圏）やレベル差について考慮しながら、専門的な文献講読に役立つ知識と読解力が習得できるよう授業を行っていきたいと思う。

表1 ピア・ラーニングやクラス全体によるアウトラインの相互理解の活動について：例

| |
|--|
| <p>・アウトラインや要約文を書く時にやはり自分の考えだけで書くから、他の人と意見交換したり、別の内容を見たりする活動は自分だけ書くより勉強が一層強められたと思う。アウトラインは要約文を書くのに重要な部分だから、必要なポイントの選び方がわかった。</p> |
| <p>・グループまたは、ペアの話し合いにより、他の人のその内容に対する考え、理解のし方、まとめ方を知るようになった。それに加えて、クラスで確認することで、内容をより詳しく理解することができた。</p> |
| <p>・アウトラインを作るのは要約文を作る第一歩なので、すごく重要なことと思います。皆さんと一緒に相談して最終に決めるのがいいと思います。</p> |
| <p>・他の人の要約文を読んだら、自分の足りない部分に気づくようになった。毎回他の人のアウトラインや要約文を読んだら、次回さらに上手くアウトラインや要約文を書いたらいいなと考えている。一緒に確認するのが必要だと思う。</p> |
| <p>・他の人のアウトラインを確認する過程で、同じ文章、同じ内容でも観点によって注目する部分はあることによって様々なものであることがわかりました。 また、自分の意見と他人の意見を比べてみるができる良い機会でした。</p> |
| <p>・自分にとって重要だと思わなかった部分がチェックした相手には、重要だと思われることがあって、そのようなことについて話し合う機会になって良かったと思う。</p> |
| <p>・時々要約文を書くときに、必要がない点を書いたことが多かったがペアと話して、他の意見を聞くことによって、何が必要であるか、何があればいいか、わかった。</p> |
| <p>・今オンライン授業ですが、時々不便なこともあると思います。お互いにチェックする時、あまり詳しく説明ができないと思います。やはり対面の授業の方が良いと思います。</p> |
| <p>・以上の通り、内容理解を深めるために、アウトラインで構成をつかみ、要約文を書く練習をし、アウトラインをグループ（ペア）でチェックしたり、クラスで確認したりする活動で、本文ごとについて、その本文の流れとか、段落ごとのつながりとか、その本文から何を言いたいことかなどがもっと今は分かるようになった。</p> |
| <p>・自分が考えた具体的な説明は、大切なことと思っていましたが、クラスでチェックしたとき、「あ、本当だ、ここはもっと中心なんだ」と思ったときもあります。よく理解するのが最も大切なことがわかりました。</p> |
| <p>・クラスで確認したりする活動は役に立つと思う。お互いに話し合うことによって、正しく要約文を書けるようになった。</p> |
| <p>・自分がつくったアウトラインや要約などが他人にチェックされたら、どこが間違えているのか、どのように直せばよいのかについてよりわかるようになりました。または、他の人のアウトラインや要約文を見ると、各人のアウトラインや要約文の書き方が違うということがわかりました。</p> |

| |
|---|
| <p>・アウトラインを書くと、それぞれの段落で言いたいことはさらに理解できやすくなるのがわかる。書いたアウトラインを要約文にまとめ、簡単に書けると思う。また、グループでチェックし、お互いに意見を出し、自分がうまくできることと間違っていたことを知るようになる。そこを直し、次に間違えないように注意する。そして、クラスで確認し、内容をさらに理解できるようになる。</p> |
| <p>・アウトラインでどのようなことを書くのか、どの内容が必要なのかがわかりました。さらに、漢字の書き間違いや書き終わったら確認しないとはいけないことも必要である。</p> |
| <p>・みんなの意見と合わせたり、色々話し合ったり、それで箇条書きでできるようになっている。どんなことが書けば、いいかはっきりわかった。</p> |
| <p>・アウトラインと要約文を書くことで、私がどうやって長い文章を分かりやすく説明するのがわかりました。特に、長い同じ意味の文を書かないように、どのようにふさわしく書いたらいいのかわかりました。</p> |
| <p>・アウトラインを作ることで、段落ごとの重要ポイントがどこなのかを考える力が少し身についた気がします。グループでチェックしたりして、お互いに考え方を交えたりできてとてもよかったです。</p> |

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2015a) 『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2015b) 『改訂版大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』アルク
- 鎌田修・ボイクマン聡子・富山佳子・山本真知子 (2016) 『生きた素材で学ぶ新・中級から上級への日本語』ジャパントイムズ
- 田川麻央 (2012) 「中級日本語学習者の読解における要点と構造の気づき—要点探索活動と構造探索活動の統合と順序の影響を考慮して—」『日本語教育』151号 pp. 34-47
- 野田尚志 (2014) 「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16号 pp. 9-14
- 野田尚志・花田敦子・藤原未雪 (2017) 「上級日本語学習者は学術論文をどのように読み誤るか—中国語を母語とする大学院生の調査から—」『日本語教育』167号 pp. 15-30
- 藤原未雪 (2017) 「上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程」『一橋大学国際教育センター紀要』8号 pp. 119-132
- 山口和代・山本葉穂子 (2019) 「学科科目の履修を目指した読解授業の実践—総合政策学部「日本語Ⅱ（読解）—」」『南山大学外国人留学生別科紀要』2号 pp. 63-74

JFL Learners' Understanding Processes of Reading Structure: Understanding Reading Outlines through Peer Learning

Naoko YAMAMOTO

Abstract

The Japanese language program in the Faculty of Policy Studies at Nanzan University is divided into three ascending Japanese proficiency levels: I, II and III. In Japanese I, introductory classes in Japanese 'grammar', 'reading and composition', and 'listening and speaking' are offered, whereas in Japanese II and III, students take 'reading', 'listening and speaking', 'writing' and 'presentation' courses to develop their academic Japanese skills.

The Japanese III 'reading' course has the specific goals of developing academic knowledge and improving students' academic reading proficiency so they can read academic papers and other publications relevant to policy studies that are necessary for taking regular academic subjects. The reading course adopts two approaches – one is to cultivate reading proficiency through understanding structure and the other is content-based giving priority to the content knowledge gained.

This article reports on the practice and views of the Japanese III 'reading' course in the structure classes, exploring how students develop their Japanese language proficiency to understand reading structure through peer learning, focusing upon understanding the outline so as to be able to summarize the content.

Keywords : JFL learners, reading class, understanding reading structure, peer learning, outline